

リカアドウ「機械論」の成立過程 (1)

眞 實 一 男

目次	I
はしがき	I
旧機械論	II
過渡期の機械論	III
新機械論	IV
むすび	V

I

リカアドウ「機械論」成立のケイキについては、大別して二つのものを考えよう。その一つは、かれの「機械論」がその当時の歴史的・社会的基盤よりいかなるケイキをうけとつたかという問題であり、いま一つは、そのような歴史的・社会的基盤を背景にして、「機械論」に関するリカアドウの内面的過程を追うという、いわばメンタルヒストリーの問題であろう。前者については他所において言及したからの、ここではもつぱら後者に焦点を集中することにした。

- (1) 本稿は、福島第8回学史学会(1953年秋)においてなされた報告草稿の後半部に手をいれたものである。なお関東学院機関誌「経済系」第21輯に掲載される予定の小稿「リカアドウ『機械論』成立の背景」はその前半部に手をいれたものであるので、併読して貰えば幸甚である。報告草稿全部につき御助言を載いた一橋大学経済研究所の大野精三郎助教授に感謝の念を捧げたい。
- (2) 前述の「リカアドウ『機械論』成立の背景」を参照されたし。

さてリカアドウ「機械論」の内面的成立過程を追求せんとする試みは、現在までにすでにいくつかのものを数える(3)。しかし前世紀の八〇—九〇年代にみられた「リカアドウの復位」以後、次々に公刊された新資料を利用してのホランダーの諸研究は(4)、その中でも特筆されるに値しよう。かれは、たんにリカアドウの主著「原理」第三版、第三章「機械について」の論理をたどるのみならず、リカアドウのマルサス・マカロツク・トラウアあての手紙集(5)、「マルサス評註」などを縦横に駆使することによつて、リカアドウにおける旧き機械論より新しき機械論への転換のメンタルヒストリーを追求するという点において実り多き成果をおさめえた。

ただかれの帰結は、当時与えられた資料(かれ自身発見したものを含めて)に基づき、かれの方法をもつてするものとしては、いちおうの終着点とみなされるものであつた。よつてこの線による成果拡大のためには、より新しき資料の提供が不可欠となり、ひとびとは、これを言及されること多く刊行されること遅き「新リカアドウ全集」に期待した。それらは他の領域(たとえば価値論)においては、この期待に答ええたやうであるが、機械論に関する限り、卒直にいつて基本的にホランダーの結論をくつがえすやうなものは何もなかつたということもできよう。それにもかかわらず、いくたの補足的資料を加えることによつて、その成果を豊富にしたことは充分に認められなければならない。ともあれこれによつてホランダーの方法に基づきリカアドウ「機械論」に関する最終・最新の定説の提出が可能となり、事実全集第一巻「原理」における編集者(スラツファおよびドツプ)のこの部分に関する発言は(6)、メンタルヒストリー的方法に基づき「機械論」成立の内面的過程の現段階における最終的帰結として受取られぬでもない。たゞそこでは他の序言の場合と同じく、できるだけ資料をもつてみずからを語らしめるという客観的方法がとられているのみならず、脚註に示された諸資料より最小限に必要な言葉を綴り合せるといったゆき方がとられておる關係上、その議論はいわば骨格的に与えられているともいえよう。よつて以下におけるわれわれの努力の方向は、基本的にかかぬゆき方を承認した上で、それに対して少しでも肉付を試みるという点に集中される。

なおわれわれは、具体的にその成立過程の追求に入る前に、あらかじめリカアドウ「機械論」の改変のポイントがどこにあつたかをばつきりさせておく必要がある。いまその要点を簡単にまとめれば、おそらく次のようにもなる

(3) たとえば、われわれは、次の如き諸文献をもつ。その内容については、小稿「パートンおよびリカアドウの『機械論』について(二)」の註三を参照されたい。(経営と経済第59号 PP. 118—121.)

(i) K. Diehl: Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos' Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung. 2 Bde, Leipzig 1905. Teil II. Kap.7. Ricardos Anschauungen über Krisen, überproduktion und Maschinenwesen. 3. Ricardo über das Maschinenwesen. SS. 425—30.

う。第一に改変前のリカアドウにあつては、たとえ一時的・摩擦的労働排除を伴うことはあつても、機械の導入は地主階級、産業資本家階級、労働者階級のすべてを通じて一般的な社会の利益であるという従来までの調和的通説がとられていた。これに対して改変後のかれにあつては、機械の導入はたとえ産業資本家階級およびこれと利害の併行する地主階級には利益であつても、こと労働者階級に關する限りは不利であるとされ、機械の導入をめぐる労働者階級と産業資本家階級（およびこれと利害の併行する地主階級）との対立が、正面きつて取上げられたのであつた。第二にリカアドウはたんに機械と労働との相反關係論を打ち出したのみならず、一步すすんで何故に機械の導入が労働者階級にとつて不利となるかという論証をも試みとする。その主要点は機械の導入に基ずく労働需要の減少であり、後者を招来するものとしての貸銀支払基金の大きさをあらわす総収入（『總所得』）の減少である。いまだし詳言すれば、その間に次のような連鎖をたどることが可能になる。すなわち改変後のリカアドウによれば、そもそも社会の純収入（『純所得』）と総収入とは必ずしも併行的に動くという保証はない。事実労働節約的な機械の導入は、純収入を増加させるかもしれないが、それはかえつて総収入の減少をきたす。ところが産業資本家階級の目標とする所は純収入であつて総収入ではないから、純収入にして増加すれば総収入の減少はかれにとつて問題とはならない。従つていま機械導入に基ずき総収入にして減少するならば、貸銀支払基金の大きさを規定するものは総収入であつて純収入でないから、当然に労働需要（雇傭）の減少が結果することになる。かくて結論的にいえば、改変前のリカアドウを改変後のかれと分つメルクマールは、次の二点に集約されよう。その第一は機械導入に對する樂觀の見解より、悲觀の見解との対立であり、その第二はその論証にさいしての純収入と総収入との併行的増加の可能性を軸とする、労働需要の純・総収入分析とでもいふべきものである。

もつともかゝる二重の内容をもつリカアドウの「新機械論」は、以下に展開するように一挙に成立したものでなく、またその新機械論は、旧機械論ののこりかすから完全に解放されていたわけでもなかつた。殊に新旧両機械論のかけはしともいふべき「マルサス評註」においては、「評註」自体の前後において互いに矛盾する表現を露呈していると思われるので、以下の敘述においては、かれの広義の機械論をばたんに旧機械論および新機械論（狭義の機械

- (ii) K. Marx: Theorien über den Mehrwert, 3 Bde, Stuttgart 1905-10. Bd. II. David Ricardo, Teil II. IV. Miszellen, 2. Die Maschinerie, SS. 308-382. 猪俣津南雄訳「剰余価値学説史、第二卷第二部」
- (iii) 小泉信三「リカアドウの機械論」三田学会雑誌、第15巻第12号（大正10年12月）PP. 1-31.（「リカアドウ研究」昭和4年、PP. 477-504所収）
- (iv) 舞出長五郎「リカアドウの機械論」経済学論集（旧巻）、第5巻第3号（大正15年12月）PP. 37-66.

論)に二分するのみならず、その中間に過渡期の機械論として「評註」におけるメタモルフォーゼの過程をそう入することにした。

II

リカアドウ経済学の出発点が「地金論争」を主とする貨幣金融論的パンフレットであつたことは、よく知られている事実である。しかしリカアドウの理論体系を形成する上に特に力のあつたものが「穀物論争」の中から生れた「低価格」(一八一五)のであつたことも、同様によく知られている事実であろう。そこでの機械に対する見解は、正而きつてのものとはいえない。しかしそれにもかかわらずわれわれは次のような発言をそこに見出しうる。「穀物の低き貨幣価格が」この階級(労働者階級)の利害におよぼす諸影響は、改良された機械の諸影響とほとんど同様である。そうしてそのことはもはや疑問とされないのだが、その改良された機械は、労働の実質賃銀を上げるといふ決定的傾向をもつ。(IV.35以下ローマ数字で全集の巻数を、アラビア数字でページ数をあらわす。)とあり、視点を機械の諸改良と実質賃銀との関係に定め、しかも明かに機械と労働との間にプラスの関係を考えているといえよう。

さらに「原理」初版(一八一七)四〇—四一ページ(I.36)においても、帽子製造業者の機械導入に関して数字的設例を示した後に、「しからばかくして、公衆は機械によつて恩恵をこうむる。これらの無言の働き手は、たとえそれらが同一の貨幣価値であるときでさえ、それらが排除するところの労働よりも、ずっと少ない労働の生産物である。……………そうしてその結果である節約(機械導入による労働の節約)は、製造された生産物の価格の切りつめてしてみずからを示す。」ということによつて、前掲の「低価格」の場合と同じく、商品の価格低下に基ずく実質賃銀の引上げという意味において、機械に対する樂觀論をのべているといえよう。この箇所こそはそのまま第二版(一八一九)に引継がれているのみならず、少しばかりの字句の変更を別にすれば、かれがその第三章に新機械論を追加した第三版(一八二二)にもそのまま残存しているのである。(I.36)

この点に関してリカアドウはかれの第三版、第三章において、旧機械論をこれまでに公表したことはないと言明

なお上記に次の如き諸文献をも追加しうるであろう。

- (v) 堀経夫「機械と労働—リカアドウの学説を中心として—」東北帝国大学経済学会研究年報 経済学 5.1936.PP.1—16.
- (vi) 堀経夫「リカアドウ『経済学及び課税の諸原理』の構成について」経済学論究第7巻第1号、(昭和28年4月) Pp.1—14.
- (vii) 岸本誠二郎「英国経済学史における1817年前後—機械論を中心として—」舞出教授還暦記念論文集(I)「古典学派の生成と展開」 PP.201—243.

しているが (I. 386)、上述の「低価格」および「原理」においては、少くともそれを公表しているといわれなければならないまい。なるほどこの場合、第三章の新機械論の基準変数は労働需要であるのに対し、以上の兩者においては、それが価格騰落に伴う実質賃銀の上下であるという相異点を認めることもできよう。しかしわれわれのメルクマールの第一に照していえば、それは明かに旧機械論に属するといわれなければならない、さらにいま一步ふみこめばそもそも価格の切下げが実質賃銀の増加を可能ならしめるためには賃銀額の減少のないことが前提されねばならぬが、それこそいわゆる補償説の見解であり、まして新機械論の意義がこのような補償説の見解より解放説の見解への脱却にあつたとすれば、その旧機械論的性格は判然とすることになる。そうしてこのような発言は、むしろリカードの旧機械論から新機械論への脱皮の不完全を示すものとみられないでもない。

さらにわれわれは、準公表とでもいうべき議會での発言や、私信等においても旧機械論の見解にゆき当ることができ。以下においては年代順に発言を追うことにしたいが、ただマレットの日記記入については第二次資料と思われるので、この原則に従わず一番最後にまわすことにした。

さてその第一は、「原理」初版刊行後ただちにバートンからよせられたと思われる手紙に對するリカードウの返信(手紙二一八。一八一七、五、二〇)であり、そこではバートンの反對にこたえて、「資本の蓄積分が固定資本例えは機械、建物等々に實現されるのに比例して、それら(資本の蓄積分)は、蓄積された資本が流動資本として使用される場合よりも、労働に對してより少なき永続的雇傭を与えるでしようし、またそれゆゑに人手に對するより少なき需要があるでしようし、人口の増加に對してより少なき必要性があるでしよう」といふことは、疑いもなく真実である。しかし必要な消費を超過しての、生産された財貨の数量は、兩者の場合において正確に同一でしようし、あるいはむしろそのバランスは、あなたが想定されるように流動資本に有利なのではなくして、固定資本に有利なのでしよう。」(H. 157)とのべている。こゝでの基準変数は明かにバートンの問題提起をうけて労働需要であり、固定資本化に伴う労働需要の減少をいちおう認める発言をしながらも、その後半においては純收入を強調することによつて問題の次元をずらしてしまつてゐるように思われる。

- (4) (i) David Ricardo: A centenary Estimate, Baltimore 1910. 山下英夫訳「リカードウ研究」
(ii) [Hollander's] Introduction to Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" by David Ricardo. edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander and T. E. Gregory. Baltimore and London 1928.
(iii) [Hollander's] Introduction to condition of the labouring classes of society by John Barton 1817. A reprint of economic tracts, edited by Jacob H. Holl

その第二は、一八一九年二月一六日の議会におけるリカアドウの演説である⁽¹⁰⁾。それはサー・W・D・クリスピンイがオウエン氏のプランを研究すべき特別委員会の勧告を提出したさいにおけるものであるが、ハンサードによれば「リカアドウ氏は、政治経済学の諸原理と一致しない理論の上に組立てられたところのオウエン氏の体系とかがれが全く交戦中であるとのべた……機械が労働に対する需要を減少させないということは、その主題「機械の導入についての主題」の全面的な見解に基ずいて、否定されえないであろう。……」(p. 30) とかかれている。ここでの基準変数の明かに労働需要であり、リカアドウが機械による労働排除という現実をみせつけられながら、しかも理論としての旧機械論に固執していたことが伺われる⁽¹¹⁾。

その第三は、エデンバラ・レビューの一八二〇年一月号に掲載されたマカロツクのバートンの見解に反対すべくかかれたかれの手紙(手紙三五九。一八二〇、三、二九)である。マカロツクの論文「課税と穀物法」は、名目的にはバートンのパンフレット「労働者階級の状態についての諸觀察」の書評であつた。そこでかれはバートンの意見に組して「機械に投資された固定資本は、つねに流動資本の著しくより大なる数量を排除するに違いない。——というのは、さもなくばそれを建造する動機がありえないのでしようから。そうしてそれだからその最初の影響は、貸銀率を増加させるよりもむしろ沈下させることでしよう。」(H. 171 footnote 1 および I. p. 1vii) とのべた。これに対してリカアドウは上記の手紙において、「機械の使用は、けつして労働に対する需要を減少せしめないとおたくしは思います。——それは、けつして労働の価格の下落の原因ではなくして、その「労働の価格」の騰貴の結果なのです。」(H. 171) と反論している。ここでの基準変数は労働需要および実質賃銀の両者であつて、リカアドウの旧機械論においては、機械の使用は労働需要を永続的に減少せしめないという側面と、機械の使用は商品の価格の切下げにより(同一の貨幣賃銀が確保されるという前提の上では)実質賃銀を引上げることから、産業資本家階級、地主階級と同じく消費者としての資格において労働者階級にも利益があるという側面とがからみあつており、その間の区別は明確でなかつたといえよう。

さらに第二次資料としてはあるが、マレットの日記記入に誌されたリカアドウの発言があげられよう。それは一

-ander, Baltimore 1934.

- (5)(i) Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810-1823. edited by James Bonar, Oxford 1887. 中野正訳「リカアドのマルサスへの手紙」上・下二巻

(ii) Letters of David Ricardo to John Ramsy McCulloch 1816-1823. edited with introduction and annotations by Jacob H. Hollander, New York 1895.

中野正訳「リカアドのマカロツクへの手紙」

八二三年九月のリカアドウの死去にさいして、三年前を思い出してかかれた懷古的文章であり、おそらく一八二〇年一月一二日のリカアドウ宅における、デナーパーテイの席上における討論のことをさしているものと推定されている。そこでは、「……機械を人間労働に代用することから結果する純然たる恩恵という主題についての支配的な意見についてそのときたまたまわたしに起つたところの反対の結果として、リカアドウ氏が（かれは当時わたしと違つた意見でしたが）、その後その主題を再考しかれの第三版に機械についての追加的な章をかくように導かれたということが、グレンフェル氏、トック氏、その他の人たちが出席されていた三年前のかれの家におけるデナーで偶然におこりました。かれは最もやさしくて、もつとも巧妙なやり方で自分でわたしにこのことを話してくれました。」(D.P. ix. およびバートンのリプリント中のホランダー序言 pp. 4-5) とかかれています。しかし当の一八二〇年一月一四日のマレットの日記記入についてみれば⁽⁶⁾、この主題のことは正面から取上げられてはいないようであり、ホランダーのいうように、「もし実際にバートンの意見がマレットの異説の想源でなかつたとすれば、かれの『反対』にリカアドウが全くよつていっているという含意は疑わしい。……たんなるテーブル上での評言以上のあるものが、重大な学説上の変更を誘引したに違いないだろう。」⁽⁷⁾ としか思われないのである。ただわれわれがここでこの資料になんらかの価値を認めるとすれば、この頃までにはリカアドウはまだ旧機械論の立場に止つていたということなのであろう。かくてかれはラディットの騒ぎようや、農村および工業地帯を掩う不況にもかかわらず少くとも一八二〇年の春頃までには新機械論的な片りんをもみせていなかつたといえよう。すなわち、機械の導入は労働に対する需要を減少させないという意味においても、または機械の導入が当該製品の価格を引下げ労働者階級の実質賃金を増加させるという意味においても、機械と労働との間にはプラスの関係が考えられていたといわれなければなるまい。

III

以上の旧機械論に対する信念のグラツキを看取しうるのは、おそらく「マルサス評註」からなのであろう。全集第二巻の序言における綿密な考証によれば (I. Pp. ix-x)、「評註」は遅くとも一八二〇年一〇月一四日頃にはかき初め

(iii) Letters of David Ricardo to Hutches Trower and others, 1811-1823. edited by James Bonar and J. H. Hollander. Oxford 1899.

(6) Works. Vol I. Introduction. pp. lvii-lx

(7) An Essay in the influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock; shewing the inexpediency of Restrictions on importation: etc. etc. London 1815.

(Works vol. 1V. pp. 1-41.)

られ、一月一六日頃にはかき上げられていたもののである。よつてリカアドにおける旧機械論から新機械論への移行の始点は、一八二〇年の秋頃からであり、「評註」はなによりも新機械論への第一歩を形成するものと考えられるのである。

ただ「評註」の前後においてかれの機械論は首尾一貫せず、ある箇所においては充分に新機械論的発言をなしているかと思えば、他の箇所においては依然として旧機械論的見解を固執しているというように、かれ自身いまだモサクの過程にあつたことをあらわにしており、その意味においては過渡期の機械論とでもよばれうべきものであつた。だから以下におけるわれわれの作業は、「評註」に混在する機械論的諸ノートを新機械論的なもの、旧機械論的なものにより分け、その各々につき吟味を試みることにあてられる。

さて最も重要な新機械論的ノートはノート一四九であろう。このノートの対象となつたマルサスの議論は次のように運ばれていた。すなわち、労働に対する需要は固定資本の増加に比例してではなくして流動資本の増加にのみ比例するというバートンの見解を持出した上で、この見解は個別的な場合には疑いもなく正しいが、一般的には（社会全体としては）正しくないとの立場をとり、どちらかといえば、バートンを半ば肯定し半ば否定するという態度にでた。これに対してリカアドウは、当面のマルサスの意見に反対すべくむしろバートンの見解を全面的に承認しようというのであつた。後日の「原理」第三版、第三章を思わせる議論が、そこに展開されているが、それは次の如く要約できよう。「労働に対する有効需要は、労働の賃銀が支払われるところのその資本部分（流動資本）の増加に依存するに違いない。」（H. 234）といつた後「二、〇〇〇ポンドの収入をもつ人が、それを資本に投下して生産的に使用する算術的設例に進む。資本投下には、附加的労働を雇う場合（流動資本への投下）と機械を造る場合（固定資本への投下）との二つの場合を考へうるが、いづれにしても利潤率を一〇パーセント（利潤額は二〇〇ポンド）として話を進める。そうすると総収入は前者より後者が大となり、その大きさは前者の二五〇ないし三〇〇ポンドに対して、後者は二、二〇〇ポンドとなる。もつとも純収入は両者の場合同一であろう。しからば「純所得によつてのみ富まされるところの国は、両者の場合において同等に強力であろう。——資本家にとつては、かれの資本が固定資本

(8) Vol. I. Introduction, p. lviiにおいては、「低価格」における発言だけが取上げられ、「原理」初版および第二版における発言はおろかそれが第三版にまでこのつていふことに対する言及はなされていない。しかしこの点についてはホルンダーもはつきりと指摘しているように少なくとも「低価格」と同一次元での発言であるといわれなければなるまい。(cf. [Hollander's] Introduction to Barton's reprint, p. 3)

(9) 堀経夫「リカアドウ『経済学及び課税の諸原理』の構成について」PP. 10—11

から構成されているのか、もしくは流動資本から構成されているのかは、重要ではありえない。しかし労働の賃銀によつてくらすところの人々にとつては、そのことが、最大の重要事である。かれらは、総収入が増加することに重大な興味をもつ。なぜならば、人口をまかなう手段が依存しなければならぬのは、まさに総収入なのだから。もしも資本が機械に実現されるならば、労働量の増加に対する需要はほとんど生じないであろう。——もしもそれが労働に対する附加的需要を創造するならば、それは必然的に労働者によつて消費されるところの諸物に実現されるであろう。(H. 236—236) としている。ここでは明かに機械の導入をめぐる資本家階級と労働者階級との対立と共に、純所得・総所得分析に基づく機械導入による労働排除がはつきりと取上げられており、いちじるしくバートンの見解に近ずいてきているものといえよう。

またこれを補足するものとしてのノート一五三においても、マルサスの提起した馬スキ耕作と手スキ耕作とに関連して生ずる馬による農業労働者の排除の問題に対して、次のようにいう。「人によつて遂行されるほとんどすべての仕事を馬でなすことは可能であろうが、このような場合における馬の「人に対する」代用は、たとえより多くの生産物を伴うとしても、勤労諸階級にとつて有利なのであるか？ 反対に、それは労働に対する需要をひじょうに大きく減少させるのではあるまいか？ わたしがいわんとするすべてのことは、より低廉な耕作方法をもつてすれば、労働に対する需要は減少するであらうし、より高価な耕作方法をもつてすれば、労働に対する需要は増加するであらうという事態が、たまたま起りそうだということである。」(H. 239) と。ここでは馬が機械にいかわつただけで、議論の筋道はノート一四九と同じであるといえよう。

さらにノート一五一においては、問題をノート一五三とは逆の局面で取上げ、「総収入および純収入の減少をもつてしても労働に対する需要が増加する」(H. 238) 場合として馬の排除による手スキ耕作者の需要増加を考えているなど、いずれも旧機械論と全く対立する見方を打ち出しているといえよう。

なおこれらの一連の新機械論的ノートに対して、はたしてバートンがどれだけの役割を演じたかはこれを正確にはしりえない。しかしおそらくノート一四九をかくにあつて、リカアドウはバートンをよんだのではないかと推測され

(10) 第31章において「他の方法で」(I. 386)といわれているのはこれをさすものと思われる。

なおこれを補足するものとしては、1819年6月26日のオウエン氏のプランについての集会でのリカアドウ演説(1819年6月28日のタイムズの記事)があげられる。そこでは委員会にかれの名が連ねられてはいるが、そのプランに全面的には賛成できないとのべている。(V. 467—8)

(11) たとえば New Castle on Tyne の Brown への返信 (実際には出されなかつ

ている。もつともこの時に最初にバートンが読まれたものなのか、あるいはこの時にもう一度読み直されたものなのかはよく分らないけれども、おそらくは後者であつたろうと思われる⁽¹⁴⁾。ソテイロフは後者であると考え、その間の事情を次の如く理解している⁽¹⁵⁾。まずマルサスは、この部分に関する限りバートンおよびシスモンディによつて影響を受けたのである。当該箇所たるマルサスの「原理」二四一ページの脚註には、「バートン氏による労働諸階級の状態についてのすぐれたパンフレットをみよ」とかかれていて、両者のうち少くともバートンよりの影響を否定しえないと思われる。他方リカアドウはマルサスを批判すべく、マルサスに批判されたバートンを読み、そのバートンの角度からマルサスを批判したもののようである。かかる意味においてノート一四九は著しくバートンのためであり、後日の第三版第三章の議論にひびように近ずいているといえよう。第三章における唯一の脚註がバートンであり、ここでは大休において肯定的引用がなされているという事実と共に⁽¹⁶⁾、このノート一四九は、リカアドウ「機械論」の改変のキイキとしてのバートンの比重を相当に大きいものにさせているといわなければなるまい。

しかし前述の如く、「評註」におけるリカアドウは、いまだ全面的に新機械論に移行し終えてなく、旧機械論のノートを見させており、より正しくは移行の過程にあつたといえよう。

たとえば以上の新機械論的な一連のノートにすぐ続くノート一五五においては、「わたしがひじように豊富な資本をもつということは、わたしが労働に対する大きな需要をもつということである。労働がひじように豊富であるということは、それを雇傭する充分な資本がないということである。」(H. 211)ということによつて、資本の増大と労働需要との直結というミスマッチ的な旧機械論の見解を露呈しているのである。

またマルサスの「機械論」ともいべき、かれの「原理」、第七章、第五節「富の継続的增加に対する刺戟として考察された、労働を節約する諸発明について」という箇所にもふざれたリカアドウの一連のノートにおいては、機械導入の利益を確保する条件としての外国貿易の問題を議論にいれながら、しかもぎりぎりの所は、機械が純粹に利益であるという見解のべられていようである。たとえばノート二四三においては、「われわれが相違するようにみられるのは此点である。わたしは次のように信ずる。すなわち、ある偶然により現在までにまたは将来においても諸外

たようであるが) においては労働者の窮境を十分に承認しながらも、むしろ穀物法の問題にずらしているといえよう。(cf. VII. 100-104, esp. 103)

(12) 14日の記入においては前々日たる12日の模様が誌されているのである。

(VIII.152-3 footnote 1)

(13) [Hollander's] Introduction to Barton's reprint, p. 5.

(14) [Hollander's] Introduction to "Notes on Malthus", p. lxx.

(15) G. Sotiropoulos: John Barton (1789-1852). E. J. Vol. LXVII No. 245. March 1952.

国となんらの商業をもたないかもしれないようなもつとも限られた地方にすんでいる人民は、それにもかかわらず、『資本の蓄積、土壌の肥沃度の改良および労働を節約する諸發明』から純粹なる諸利益を引きだすであらうと。

——マルサス氏は次のように考えます。すなわち、多くの事例において、それら「の三者」はかれら「その人民」に對して害のある贈物でしようし、かれによれば、それらを恩恵あるものにするためには、それらは需要に隨伴されなければならぬと。さてわたしは、需要は供給にのみ依存すると思ひますので、諸商品の豊富をうる手段は、けつして恩恵的である以外にはありえないと思ひます。』(H. 365)ということによつて、明かに労働節約的機械の諸發明を無條件的にプラスとしているのみならず、その証明としてセーの販路法則を援用しているといわなければならぬ。

そうしてかゝるセーの法則の雇用問題への適用がとりもなおさず補償説であると考へられるが、かれは、その直前のノート二四二においても、消費余力は無限であるので、排除された労働は他の商品の生産にあてられうと考へてゐる模様である。すなわち消費は生産の如く苦痛を伴わないので、事實上無限であるといつた後、「想定された事例においては、おそらくわれわれの綿製品をすべてわれわれが消費するといふ願望をもたないであらう。しかしそれらを生産する労働は、われわれが消費したいと思ふ他の諸物を生産するかもしれない。』(H. 364-365)とのべており、明かに「原理」第三版第三章(J. 387)で誤れるものとして言及される旧機械論を展開しているといわなければならないまい。

さらにノート二三六においては、一使用部面から他の使用部面への資本の転用に関して、次の如く發言する。すなわち「一使用から資本を引上げてそれをもう一つの使用におくさいに、一般には相當な損失があるといふのは、眞実である。しかし想定された事例においては、それ「損失」はけつして機械の發見より生じる利益と等しくありえない。個人は損害を蒙るかもしれないが、社会は恩恵をうける。』(H. 351)として、機械の導入は社会の利益としてはつきりと肯定されている。そうしてその根拠としては、雇傭が減少せず貨幣賃銀が同一であることおよび商品の價格の下落による実質賃銀の上昇が措定されているようである。さらに以上の引用に續けて労働量を規定するものは資本の価値ではなくしてその数量(生産物の数量におき直されているが)であることを力説した後に、「……しかし問

題は、なんらかのより少ない労働者が雇傭されるのであろうかということであり、また社会がこの個別的諸損失以上に大なる恩恵をうけるかどうかということである。そうしてこの点についてわたしは、マルサス氏を満足させるためになんらそれ以上の議論を用いる必要はないであらう。なんとならばかれはそれを認めているのだから——かれは全資本がより大なる生産物をあげるだろうということを承認しているのだから。さて社会が主として興味をもつのは外ならぬこの点なのである。実際の享受手段が増加するであらうこと、およびそれらの享受物の分配においてより少ない数量がその人民の最も多数な階級の分前にあてられないようにすることが望ましい。われわれは、同一の貨幣資本が労働の扶持に使用されるであらうことをみてきた。そうしてその人民は、増加もしくは減少したとは想定されていないので、かれらは同一の貨幣貨銀をうるであらう。(I. 353) といふ、すぐに続けて「しかし諸商品は全くより以上に豊富でありまた低廉であらう。従つて各人の貨銀はより大なる享受物をかれに調達するであらう。」(I. 353—354) ともいふ。

さらにノート二三九においては、「われわれがしりたいと思うのは、『機械の』諸改良がいかなる諸事情の下においてもわれわれに對して恩恵的以外ではありえないかどうかということである。マルサス氏の議論は、それ以外の場合もありうるというのである。」(I. 361) といふことによつて、外国貿易とは區別された、機械の諸改良についての純粋なる恩恵を打ち出さんと努力しているといえよう。

最後にノート二五七があげられよう。これはかれの「原理」第二版、第二六章の「総収入および純収入について」(初版、第二章)を批判したマルサスの「原理」四二五ページの脚註に對するリジョインダーともいふべきものである。そうしてこの点はリカアドウ新機械論の第二のメルクマールが、純所得と総所得との併行的増加の否定であり、かれの新機械論が総所得・純所得分析による労働の排除とよばれていることよりも⁽¹⁷⁾、極めて重要な論点を形成するものと思われる。さてノート二五七で取上げられるリカアドウとマルサスとの対立は、国家に重要なものは総所得なりや純所得なりやとの問題をめぐつて二つの論点を含む。その第一は次の如く展開される。すなわち、リカアドウでは担税余力、貯蓄余力、もしくは不生産的階級(例えば兵士)の雇傭余力が「国家の眞實の利益」の内容であると考

(17) 総所得・純所得分析と固定・流動資本分析との關係については小稿「パートンおよびリカアドウの『機械論』について (三)」経営と経済第60号(昭27. 9) PP. 32—4. の(脚註95)を参照せよ。

えられているので、五〇〇万人の労働者が働いて、五〇〇万人分の生活資料（食物および衣服よりなる）によつてあらわされる余剰分としての純所得をうみ出す場合でも、七〇〇万人の労働者が働いて、同じく五〇〇万人の生活資料をあらわす余剰分としての純所得を作り出す場合でも、「国家の眞実の利益」にとつては同じであるとされる（I. 329）。だからリカアドウでは総所得よりもむしろ純所得が優位を与えられているということになる。これに対してマルサスはどちらかといえば総所得の方を重視する（II. 378）。そしてその立場から上記脚註における批判が加えられる。すなわち、リカアドウの想定する両者の事例において労働者が同一の状態において扶養されるならば、七〇〇万人の労働による方がたとえ純所得としては同じであつても総所得にして大であるならば、一国のために望ましいであらうといひ、また少くとも附加された二〇〇万人の労働者はこれらの賃銀の一部を処分しうるはずだろうとも附言する。そしてリカアドウのノート二五七の前半では、むしろこの最後の点にリジョインダーが集中される。すなわち、賃銀が労働者たちに純収入の一部を与えるほどのものであるかもしれないことを否定しわしない（II. 381）けれども、マルサス氏は問題の次元を取違え、それだけの余剰分を生産するには七〇〇万人がぜひとも必要であるということ忘れていゝという。

次に第二の論点に移ろう。その場合には七〇〇万人の雇傭がむしろ五〇〇万に減少するという過剰労働および過剰資本のケースに焦点がかわされ、われわれの問題により近いものであるといえよう。マルサスは上記脚註の後半において、かかる変化の場合には労働および資本が過剰となるから、リカアドウの立場を貫けば、シスモンディ氏やオウエン氏の立場と一致しなければならなくなるはすなのであろう。ただし自分が労働節約的な機械の諸發明に賛成するのは（そしてリカアドウ氏はその結論に関してのみ同意見なのだが）、かれの場合とは反対に總生産物もそれによつて増加すると考えるからであるといひ、この所、リカアドウとマルサスは攻守所を変えたような格好になつてゐるといえよう。さてリカアドウのノート二五七の後半においては、直接にマルサスのこの意見にリジョインダーを試みることなく、むしろ「原理」の仏訳にふせられたセーの批判に対する反批判を加えるというゆき方をとつてゐる。そこでも問題の次元はいささかずれて、アダム・スミスの純所得に優位をおく基準の外に、もつと一般的な人間の幸福に関する

基準もありうると逃げているようにも思われる。すなわちこれまた第三版の脚註に結実したように (T. 319)、「わたしはただ租税を支払う力に關するアダム・スミスの議論に答えつつあつただけで、他のいかなる場合でも疑いもなく最も考察に値するものとしてのそんなに多くの人間の幸福を考察しつつあるのではないと注意深くみずから防禦していても、かれ〔セー〕はあたかもわたしの評價においてはこの考察は全く重要でないかのように語っている。かれがわたしを不当に取扱つたことをわたしはかれに確言する。——そのことは一瞬もわたしの心から消えていないし、またわたしはその正当な重要さでそれを考えなかつたこともない。」(H. 362—363)と論難する。

しかしこれらの発言は、問題の次元をすりかへることによつて總所得と純所得の背致という正しい問題提起をはばんでいるのみならず、その部分的譲歩にもかかわらず、そこにはやはり純所得の優位が貫かれているとみなされる限り、それはまた後述のように、暗黙のうちにセーの法則につながつているといわれなければなるまい。

最後にリカアドウはマルサスあての手紙四〇五 (一八二〇、一一、二九)において、この点に關する自説を固持し、「純生産物 (neat produce) というこの言葉は、あなたの書物ではあいまいに用いられています。そうしてわたしは純生産物および總生産物についてのべたところの事柄に對する言及への根拠にされています。この言及は純收入という言葉に附された意味に従つて、正しくもなり、正しくなくもなりましよう。しかしこれ以上の事はわれわれがおあいつての上のことにしまししよう。」(W. 311)といつており、全集第一卷「原理」の序言者は、これをリカアドウの旧機械論(われわれの表現によれば過渡期の機械論)の最後の指標としていようである。(I. P. 13)

さて次項に詳説するようにかれの新機械論の最初の指標は、一八二一年三月一二日付のシスモンディあてのマルサスの手紙であろうから、リカアドウが新機械論に最終的に移行したのは、一八二〇年一月二九日から一八二一年三月一二日までの間であるという推定が可能となるわけである。(I. P. 13)

Ⅵ

前節の終りにのべた如く、リカアドウの新機械論への移行を最初に指示するものは、シスモンディあての手紙中に

みられるマルサスの發言なのであつた。一八二二年三月一二日付のその手紙では、「あなたは次のようなことをお書きになつてむしろおよるべきになられるでしょう。すなわちかれ〔リカアドウ〕は機械が社会の労働諸階級におよぼす諸影響という主題についてのかれの意見を変更し、かれがまさに出版せんとしているかれの著作の新しい版〔第三版〕においては、たとえそれ〔機械〕が純生産物を増加させるとしても、たんに一時的のみならず永続的にもまたそれは労働者に害を与えるであろうというまでに至つてゐるだろう——わたしにはそう信じられるのですが——ということなのです。これ〔この意見〕はわたしに違ふのとちようど同じ所まで、あるいはおそらくそれよりも少し先にまで進んでゐるようです。しかしかれがその主題についてとる所の見解は、やや異つております。」(M. 377)と報ぜられており、その内容をさだかにしえないとしても、機械論におけるリカアドウの改変の事実および「原理」第三版における第三二章の追加がいち早く伝えられてゐるといへよう。

リカアドウの「原理」第三版は、一八二一年の一月末にその第一章がその他の諸章と共に印刷にふされていたらしいが、当の第三章がいつ頃でき上つたかについては判然としない。ともあれ第三版は四月中旬頃までには刷り上つてはいたが、ただちには販売されず暫らくはマレーの書庫に眠つていたらしい。だがリカアドウはマレーをして第三版をその売出し以前にマカロツクやセーなどに贈呈せしめていたやうなので、新機械論の内容はリカアドウをとりまく一群の人たちには四月下旬頃にはすでに知られてゐたものとも思われる。(C. P. 113)

事実その献呈をつげるリカアドウのマカロツクあての手紙(手紙四二八。一八二一、四、二五)では、「トランズ大佐は、わたしに蓄積および機械の使用に関するあなたの論文を送つてくれました。そうしてたとえわたしの現在の諸意見に全く一致しない諸部分がその論文の中にあるとしても、わたしはひじやうに結構なものだと思ひます。わたしは以前の手紙で、機械の諸利益に関するわたしの感じを変更したことをおしらせしたと思ひますし、またわたしの書物の新版においてその主題について一章をかくことがわたしの意図であつたと思ひます。わたしは先週マリー氏に一部をあなたあてに送るやうに要求しておきましたので、あなたはこの時までと同章をおそらくはおよみずみなものでしょうから、わたしがこゝでわたしの諸見解を説明することは、必要ではないでしょう。——しかしながらわた

しがあえて与えんとしたその意見の正しさについてあなたを満足させたかどうかについてあなたからおきかせ下さるならば、ひじように嬉しく思います。……」(W. 373) との言葉がみられる。ここではたんなる獻皇の事実をこえていろいろのことがふれられている。第一にマカロツクは、かれのエデンバラ・レビューの「一八二一年三月号の第六論文として」「機械および蓄積の諸影響」をかき、そこでリカアドウの旧機械論を採用して「機械の改良は、おそらく労働に対する需要を減少せしめもしないし、もしくは貨銀率を切下げもしえない。」(W. 366 footnote 2) によれば、同誌 P. 125 であるよし」といつたばかりの所であつた。Ⅱでものべたように、マカロツクは一八二〇年一月号のエデンバラ・レビューにおいて、機械の導入が労働者階級の不利であるという意見を發表して、手紙三五九によるリカアドウの批判をうけた。その結果はマカロツクの意見の変更となり、それが一八二一年三月号のエデンバラ・レビューの論文となつたのであるが、この時リカアドウはすでに立場をかえていたため、マカロツクとリカアドウとはいま一度ゆき違ふことになつたのであつた。第二にリカアドウは前便でしらせたといつてゐるが、これはリカアドウの思い違いらしく、従つてこの改変はマカロツクにとつては寝耳に水ということになり、第一の事情ともあいまつてかれの憤懣はやるかたなく、日頃にも似ず相當に厳しいリカアドウあての抗議の手紙が發せられるようになったことは後述するとおりである。

もつともわれわれはこの手紙によつてネガテヴに改変の事実をしりうるが、具体的にどのような変更が行われたのかをポジテヴにはしらせられない。そうしてその内容がづぶさに分つたのは、五月一八日に發売された (J. P. L.) 第三版で新しく附加された第三章「機械について」の全文の公表が最初であつたといえよう。そこでは⁽¹⁸⁾、旧機械論と新機械論との相違がかれ自身によつてはつきりと打ち出されたのみならず、かれ自身自分の新機械論をいわゆるリカアドウ・デーゼとしてしられる次の四箇の命題に要約した。

「一、機械の發見ならびに有利な投下は、つねにその国の純生産物の増加に導く。もつともそれ〔機械の發見ならびに有利な投下〕は、わづかばかりの間では、その純生産物の価値を増加しないかもしれず、また〔事実〕増加しないのであらうけれども。

(18) この点について詳しくは、小稿「パートンおよびリカアドウの『機械論』について(二)」経営と経済第59号(昭和27.3) PP. 117—125 を参照されたい。

二、一國の純生産物の増加はその総生産物の減少と両立しうるし、またそれ「機械」がその総生産物の数量およびその価値の兩者を減少させるかもしれず、「また」しばしば減少させるに違いないとしても、それが純生産物を増加させるであらうならば、機械を使用せんとする諸動機はつねにその使用を確保するに充分である。

三、機械の使用はしばしばこれらの利害に好ましくないという労働者階級によつて抱かれる意見は、偏見やあやまりに基礎をおくものではなくして政治経済學の正確な諸原理に適合するものである。

四、機械を使用する結果としての、改良された生産手段が、総生産物を減少させない大きさの程度で一國の純生産物を増加させるとしたならば（わたしはつねに諸商品の數量を意味し価値を意味しているのではないが）、その場合にはすべての階級の地位が改良されるであらう。地主および資本家は、地代および利潤の増加によつてではなく価値においてひじょうに大きく切りつめられた諸商品に同一の地代および利潤を支出することから生ずる諸利益より恩恵をうけるであらうし、他方労働者階級の地位もまた次のような諸理由よりかなり改良されるであらうから。すなわち第一にしもべの召使たちに對する需要の増加から、第二にかかる豊富な純生産物が許容するであらうところの収入よりの貯蓄分に對する刺戟から、および第三にかこれらの貨銀が支出されるであらうところのすべての消費品目の価格の低下から、そのようになるであらう。（L. 391—392）

他方手紙四二八による前ぶれのみならず、第三版第三章を読むことによつてリカアドウの改変を確認させられたマカロツクは、これに對してすぐさま抗議の手紙を發した。手紙四三一（一八二一、六、五）はそれであり、そこでの論難は新機械論の改変に集中される。「同時にわたしは次のようにいわねばなりません（そうしてわたしは、自分がつねにみずからの師として仰ぐことを誇りうる人とひどく意見をことにしていると感じなければならぬ残念さをもつてそういうのですけれども）。すなわち卑見によればこの版（第三版）における機械に関する章は、同書「原理」の価値をひじょうに著しく害うものであります——マルサス氏の諸議論に對するあなたのかち誇られた解答を読んだ後、あなたがそんなにもすぐにかれと握手しすべてをホウ棄しようなどとは思ひがけませんでした——というのはそれが実際にあなたのなされたことなのですから——そうしてその点を一、二ヶ月前まではあなたは論争されていたのでした

が——卒直その過剰は、この場合、ごじぶんのおきにいりの學問にあなたがひじように重大な危害を加えられたという事になります——あなたがそれらの誤謬を得心されるやいなや、自分の以前の諸意見を否認されるということとは、たしかに適當なことでしょう、だけれどもあなたが正式の撤回をなされることはちつとも必要ではなかつたようにわたしには思われます——あなたの目的はその學問の本當の諸利益を促進させるより以外ではけつしてなかつたのですし、またそれ以外でもありません。しかし高名の一經濟學者がある日には一組の諸意見を懸命に弁護し翌日にはそれらの意見を無条件に引渡すのを見るよりも、これらの諸利益にもつと有害なものは何もないと考えられる点においてわたしに同意されるのではないだろうかと思ひます——以前にあなたとマルサス氏やシスモンディ氏との間に存在していた基本的諸相違点が（なんとならば残念ながら現在ではそれらはほとんど消滅したと考えられますから）、政治經濟學はゴマカシであり、基礎なき建物であると多くの人々をして信じせしめました——そうして以前にその意見であつた人々は、現在その考えを拘く多大のよりよき根拠をもつに至つたとわたしは確信します——」（Ⅲ. 381—382）といつた其合にマカロツクの訴えは綿々と続き、さらには「あなたの議論はたしかに仮定の上にたたれてのものなのでしょう。しかしその仮定はかたわらに投捨てられるでしょうし、そうすれば機械の拡張に反對してうめき声をあげ、たんに租税の重圧や商業に関する諸制限よりの必然な歸結であるところの「まさに」という言葉が消去されている」悲惨をばその「機械の」せいにするとところの人々は、あなたの權威によつてみずからを固めることになるでしょうし、もしあなたの推理やマルサス氏のそれがうまく基礎づけられるなら、ラディットたちに対する諸法規は法令集の恥さらしでありましょう——」（Ⅳ. 384—385）とさへいつている。

しかしこの点に関するリカアドウの応答は確固としていた。マカロツクあての手紙四三三（一八二一、六、一八）において、その論難に答えながら新機械論を詳述し、「小著の第三版において、機械の主題に関して、わたくしの意見の変更を認めたやり方について弁護したいとは思ひませんが、それ「意見の変更」が、政治經濟學は基礎なき建物であると主張してきたところの人々をその意見に賛成する附加的諸論をもつて武装させるといふ点についてはあなたに同意できません。わたしの意見の変更のすべては、單純にこういふことです。すなわちわたしは以前には機械は一

国をして年々その商品の總生産物の附加を可能ならしめると考えていましたが、いまではその使用はむしろ總生産物の減少に導くと考えているのです。わたしはそのように考える自分の諸理由を申しのべておきました。そうしてもしもわたしの間違つていることが分りましたら、もう一度わたしの誤りを認めたい気持ちであります。」(Ⅲ. 396—397) といひ、マルサスと自分との相異点を指摘するのみならず、算術的設例をも示して説得に努めたのであつた。

これを受取つたマカロツクはその説明の一部を了承したにもかかわらず、なおかつリカアドウの議論に全面的に追隨できず、折返し次のような再抗議の手紙四三四(一八二一、六、二二)を發するに至つた。「……わたしは、あなたがマルサス氏と一緒になられたといつた点のわたしの誤解についておわびしなければなりません——わたしがのべようと思つたのは「機械の使用はある場合においては不利益であると考えられることにおいてあなたがそんなにもすぐにかれ「マルサス氏」と一緒になられるだらうとは思ひもかけなかつた」ということなのでした——」(Ⅲ. 391) という弁解にはじまり、続いて基準変数を生産物の価格におくことによつて機械の有利性を立証せんとする旧機械論的次元の問題のむしかえしを執ように試みているともいえよう。

リカアドウはこれに對してもただちに、マカロツクあての手紙四三六(一八二一、六、三〇)において次の如き反論をくわだてる。「機械の使用によつてその国のその産業の總年生産物〔年〕という文字がさう入されている」が減少するだらうということを認めることにおいて、あなたはその議論をホウ棄されています。なんとならば總年生産物は、勤勞階級の雇傭の減少以外のいかなる方法でも減少されえないからです。もし現在労働がなしているところの仕事すべて機械がなしうるとしたならば、労働に對する需要はなくなりましよう。資本家でないところの人々、従つて機械を買うか借入れるかすることのできない人々は、何物をも消費する資格がないということになりましよう。」(Ⅲ. 399—400) と「一歩も譲つていないのである。

このことを側面より裏すけるものとしては、リカアドウのマルサスあての手紙四四二(一八二一、七、九)があり、そこではマカロツクとのやりとりを紹介すると共に自分の新機械論を確固として堅持しているといえよう。すなわち「マカロツクは特にまた強く、わたしの機械についての章に反對しております。——それを承認することによつてわ

たしがわたしの書物をめちやくちやにし、さらにわたしが公言した諸意見によつてもまたその諸意見を公言したやり方によつてもその學問に重大な危害を加えたとかれは考えます。二通ないし三通の手紙が、この主題についてわれわれの間にとりかわされました。——かれの最後の手紙で、機械使用の影響は總生産物の年々の數量および価値を減少させるかもしれないことをかれが認めているようにわたしには思われます。この点を譲歩することによつて、かれはその問題をホウ棄しています。なぜならば總生産物の數量の減少をもつて同一の労働雇傭手段があるだろうと主張することは不可能なのでしようから。この主題についてのわたしの諸命題の正しさは、わたしには絶対的に証明可能のようには思われます。』(K. 14—15) ときめつけてゐるのである。

さてリカアドウとマカロツクの両者間における機械論に関する意見の不一致は、その後もそのままに放置され未解決のままに残されていたようであるが、約一年後にはまたまた論争のむしかえしに遭遇する。マカロツクはその手紙四九五 (一八二二、四、一七) において、エデンバラにおけるかれの公開講義の聴講生イングリッス氏 (Mr. Ingliss) をリカアドウに紹介したのみならず、蓄積および資本に関する諸講義の送附をつけ、「これらの諸講義において誤つているとあなたが考えられるところのものは何もないとわたしは確信しますけれども、しかもそれらによつてのみわたしの政治經濟學を推量されないようにと思つています。』(K. 184—185) と予防線をはつてゐるがその内容についてはしらされるところがない。

ただこれに対するリカアドウの返信たる手紙四九七 (一八二二、五、七) では、諸講義の欠点をばマルサス評註式なやり方で簡条書にしているところより、マカロツクがいぜんとして旧機械論的段階に止つてゐる事を間接にしらされるのである。いま当面の機械論に關係あるものだけをぬき出してみれば、「一、あなたは『労働に対する需要はその国の資本が増加するに従つて増加するに違ひなく、またそれはその減少するに従つて減少するに違ひない』といわれます。これは絶対的には正しくない——わたしが自分の貯蓄分をもつてみずから工場を建て『家』のかわりに『工場』となつてゐる』もしくはジョウ氣機關を建造するかもしれない——わたしはそれによつてわたしの資本を増加することになりましようが、それに続く年にはわたしはより多くの労働を雇傭しないでしょう。……六、『諸個人の利害

はけつして公共の利害と相反しない。これにわたしは同意できない。機械の事例においては、親方と労働者との利害はしばしば相反する。地主たちの利害と公共の利害とはいつも同一なのでしようか？ あなたはそのようにはいられないと確信していますけれども。七、批評。われわれが機械の使用によつて排除された労働者たちを雇傭しうるだろうということをわたしは否定する。(L. 103—104) 等々があげられよう。

以上みてきた如く、リカアドウは一八二一年の改変後は一貫して新機械論を擁護して一歩も譲るところがなかつたといえよう。一八二三年九月リカアドウは他界したが、マカロックはいま一度かれの機械論を改変し、かれの「経済学原理」(一八二五)において、「しかしこの種の場合は想定されるであろうけれども同時に、それ〔その種の場合〕がいままでにけつして現実につたこともなければ、またこれからも起りそうにない」ということは、安全に断言されうるであろう。⁽⁹⁾と発言することによつて、リカアドウの新機械論を承認したにもかかわらずこれを完全に棚上げしてしまつたといえるのである。

さてこのようなりカアドウの新機械論の定式化は、ラディカルな分析武器を政治経済学に提供したのみならず、当時の世論に対しても大きなインフルアンスを与えることによつて進歩的な役割を果たしたであろうことは容易に想像されるところである。しかもかれの新機械論はいくたの旧機械論的母斑を伴つており、その意味においてかれの脱皮は完全ではありえなかつたともいえよう。新機械論をうちだした第三版の第三章自身においてもその立場を貫きえていないし、他の諸章においても第三章と矛盾すべきような発言を残しているといわれなければなるまい。

われわれはまず前者よりはじめよう。リカアドウは機械の導入が労働者階級の利害と一致せざることを認めはしたが、しかもかれは「機械の制限的使用」を反対するものではない。第三章の最終部分においてかれは「わたしがいままでなしてきたところの敘述は、わたしはそうに希望するのだが、機械が奨励さるべきでないという推論に導きはしないのである。」(L. 365) とつて、原理と政策とを、あるいは可能性と現実性とを区別することによつて機械に対する弁護論のべているともいえよう。そこでのかれの議論の大筋は、次のように運ばれる。すなわち機械が現実には労働者階級に有害でありうるのは、改良された機械が突然に発見されしかも広範囲に使用される結果として、既

(19) J. R. McCulloch: The principles of political economy; with some inquiries respecting their application and a sketch of the rise and progress of the science. Edinburgh 1825. 4th edition, corrected, enlarged, and improved. Edinburgh 1849. p. 214.

存資本が現在の用途から引上げられ固定化されるといふ特殊な場合にのみ限られるのである。ところが現実にはかかる発見は徐々に行われるものであるから、それは少しも既存資本の引上げないし転換の問題を生ぜしめることなく、ただ新しく貯蓄もしくは蓄積された附加資本の使用を規定するにすぎない。従つて機械はぎりぎりのところ労働を排除するものではなくして、せいぜいのところ労働需要の増加率を減少せしめるのみであり、労働需要の絶対量はその漸減的比率にもかかわらずいぜんとして資本増加に伴つて増加することになるのである⁽²⁰⁾。そのみならず一步譲つて総所得の減少による一時的労働排除を認めた場合でも、機械導入の結果として生ずる純所得の増加が新資本の形成に有利であるところから、最初に失われた総所得よりも大なる貯蓄ないし蓄積分がまもなく一つの基金に形成され、純所得と総所得との併行的増加が可能になるとさへいう。さらにはもしもその国において機械の使用が許されないとしたら、純所得の最大をのぞむ資本は外国に輸出され、労働需要は皆無となるから、いやしくも他国において機械が使用される以上自国においての機械使用は反対されえないとの立場をとる。(I. 395-396)⁽²¹⁾

問題を後者に戻せば、われわれは第三版の諸所にかれの旧機械論的のこりかすをみいだしうる。第一にはⅡに前述した第一章「価値について」の第五節中にみられた機械の有利性に対する発言 (I. 41-43) をあげることができよう。

第二には第五章「賃銀について」中にみられる機械への肯定的発言であらう。いま当面の問題に必要な限りでのその議論をたどれば、次のようになる。そこでは資本増加を価値および数量の両タームで考察した後兩者が併行するケースおよび背反するケースにつき実質賃銀の検討が試みられているのであるが、殊に後のケースに焦点が注がれている。「あるいは資本はその価値が増加することなくまた実際にはその価値が減少しつゝある場合でさえ「数量として」増加するかもしれない。一国の食料や衣料に附加がなされるのみならず、その附加が機械の助力によつて、それらの生産に必要とされる比例的労働量の増加をなんら伴うことなしにまたむしろその絶対的減少を伴うことによつてなされるかもしれない。資本の数量は増加するかもしれないが、他方その全体を一緒にしてもまたはその部分を個々によつてみても、資本は以前よりも大きな価値をもつことなく実際にはより小さな価値しかもたないでしよう。…

(20) この絶対的減少と相対的減少との問題がリカアドウとバートンを分つ基本的区別であるが、この点については小稿「バートンおよびリカアドウの『機械論』について(一)」経営と経済第58号(昭26.9) PP. 25-26を参照のこと。

なおリカアドウはここでバートンを引用してその批判をなしているが、この点についてはむしろバートンに優位が認めらるべきであらう。(I. 395-6 footnote)

(21) 1823年5月の議會での討論においても、リカアドウは機械の広範囲にわたる使用が労働排除を伴うことを認めてはいるが、しかも機械使用の禁止を意図す

…第二の事例では「数量と価値とが背反する事例」それ「労働の自然価格」は定常的であるかも知しくは下落するでしょう。しかし両者の事例とも「一致する場合の第一の事例をも含めての」市場賃銀率は騰貴するでしょう。なんとならば労働に対する需要の増加は資本の増加に比例するのでしょうかし、それ「仕事」をなすところの人々に対する需要はなさるべき仕事に比例するのでしょうか。……第二の事例においては、労働者の状態はひじょうに大きく改善されるでしょう。かれは、かれおよびかれの家族が消費するところの諸商品に対してなんらの増加した価格を支払わねばならぬことなくおそらくは減少した価格をもつて増加した貨幣賃銀を受とるのでしょう。労働の自然価格がその以前の低き切りつめられた自然価格に再び沈下するのは、人口に大きな附加が加えられてからのことなのでしょう。」(I. 105-106) といっているように、実質賃銀を増加させるものとしての機械の使用の承認および資本の増加をただちに労働需要増加とみる見解などの旧機械論的思考が残存しているといわれなければなるまい。

なお第三にいささか問題の次元がずれるけれども、第五章の最後の部分 (I. 105-106) に展開されるかれの救貧法反対の議論も、機械による失業もしくは構造的失業の問題を現実性として考えていなかったことの副次的証明を提供するもののようにも考えられる⁽²²⁾。

第四には、第二章「価値と富」中にみられる自然力を利用するものとしての機械への肯定的発言であろう。「…機械の援助もしくは自然科学 (natural philosophy) の知識により、以前には人間によつてなされたところの仕事を自然諸力をしてなさしめるようにさせるやいなや、かゝる仕事の交換価値はそれに応じて下落する。もし一〇人の男が粉ひき機をまわしており、しかも水や風の助力によりこれらの一〇人の男の労働が省きえられることが発見されるようになれば、一部分はその機械によつてなされた仕事の生産物たる精粉は節約された労働量に比例して価格が下落する。そうして社会はその一〇人の男が「他所で」生産しうるところの商品だけより豊富になるう。なんとならばこれらの扶養にあてられる基金はちつともそこなわれないからである。」(I. 236) ということによつてはつきりと補償説的見解をのべているのである。

さらに第五には、第二章「蓄積の利潤および利子におよぼす諸影響」中におけるセーの法則の肯定がある。

る法律には賛成していないようである。(cf. W. Smart: Economic Annals of the nineteenth century. 1821-1830. [vol. II.] 1917. p. 147.)

(22) この点については小稿「リカアドウおよびパートンの『機械論』について(三)」経営と経済第60号(昭27,9) p.140を参照のこと。

「諸生産物はつねに諸生産物もしくは諸サーヴィスによつて購買される。貨幣はそれによつて交換が行われる媒介物にすぎない。」(1. 291—292) という古典的発言にみられるようにリカアドウは最後まで販路法則に執着した。リカアドウ新機械論の脱皮の不充分性の根拠はおそらく、セーの法則を信奉しながら、しかも機械による労働の排除に取組まんとしたところに求められるかもしれない。だから逆にリカアドウ「機械論」の真の完成のためには何よりもまずセーの法則をつきくずすことが必要となるのではあるまいかとも思えるのである。

第六には、第五と全く無関係ではないが第二章「総収入および純収入」中における純収入優位の発言である。Ⅲでも前述した如く、リカアドウは旧機械論的純収入優位の資本家的概念と、新機械論的総収入優位の労働者的概念との対決において徹底的でありえなかつた。「……多人数の人を雇傭することは、わが国の陸海軍に一人の人をつけ加えることもしくは一ギニアでも多く租税に貢獻することを可能ならしめない。……しかしながら、租税支払の能力は純収入に比例して総収入には比例しないということは、明白であるに違いない。」(1. 348—349) というように租税余力もしくは軍備余力としての純収入に力点がかけられるけれども、新機械論のメルクマールの一つとして純収入と総収入との併行的増加が否定され、賃銀基金の大きさをあらわすものとしての総収入が重視されていることよりすれば、この点においてもリカアドウの脱皮の不充分性は充分に証明されることとなる。

かくてかれの新機械論は、一つの大きな転換を志し、また事実大きなセンセーションをまきおこしたものの、その追及において徹底性をかきその結論において後退をよぎなくされているといつてもよいであろう。そうしてこの点こそがパートナーのリカアドウに対する優位の一つを形成することにかつて筆者の力説したところであつた⁽²³⁾。もつともリカアドウのために弁護すれば、資本主義の上向的發展の時代で思索したかれとしてはやむをえざる帰結であつたかもしれないし、少くともかれの学問的良心はかれの限界にもかかわらずその「機械論」においてリカアドウ体系の脱皮への第一歩をふみだしていた点を評価すべきだということもできよう。またその意味においてはかれの「機械論」はただかれの体系の発展にとつて重要であつたばかりでなく、その後の資本主義の発展に照しても極めて象徴的であつたともいわれねばなるまい。まことに資本蓄積過程における機械と労働との関係こそは、「資本主義のゆくえ」

(23) 此点については小稿「リカアドウおよびパートナーの『機械論』について (一) — (三) 」を参照されたい。

の問題にただちに関連するからである。

V

筆者はここ数年来、リカアドウ「機械論」を種々なる角度から追求してきた⁽²⁴⁾。リカアドウ「機械論」の想源としてのバートンにさかのぼるのみならず、バートン・リカアドウ理論のその後の系譜をもたどってきた。しかし学説史の研究がコットウ趣味に陥つてはならないとすれば、ひるがえつてリカアドウ「機械論」の現代的意義が探究されなければなるまい。それはおそらく何よりも技術進歩のシンボルとみなされうべき機械の導入が、労働の排除を伴うことによつて必ずしも労働者階級もしくは社会の一般的階級の利益に奉仕しないという資本主義の体制矛盾をとくカギを与えるものだといふところに求められよう。資本主義の全般的危機の時代においては、失業はたんなる景気的なものとは考えられず、構造的失業として現象しその解決を経済学にゆだねている。それは具体的には技術的失業理論もしくは長期失業理論として定式化されつつあるところのものであるが、これにも種々のものが考えられよう。その中の第一の、しかも最有力の理論は、マルクスの「産業予備軍の理論」であろう。その第二は、イギオロギー的には社会民主主義に属する一連の学者、例えばレーデラー(E. Lederer)、ナイサー(H. Neisser)、ケーラー(A. Kahler)等による「技術的失業の理論」であろう。その第三はケインズ理論の長期化をねらう一群の人たちによる「ケインズの長期失業理論」であろう。さらにこの第三のものの中には種々なる異種を数えうるが、いずれにしても第一・第二グループとはいささか肌合を異にしていると考えられ、その総合の危険性をとくむきもあろう⁽²⁵⁾。しかもケインズのインナー・サークルであり、かの女自身実り多き「ケインズの長期失業理論」の一派を打ち出しているJ・ロビンソンによれば、新古典学派(マーシャル)もケインズ学派(ケインズ)もマルクス学派(マルクス)もかれらの共通の想源としてのリカアドウをもつことにおいて共通の性格をおびる点が強調されている⁽²⁶⁾。もちろんこのことは直接に雇傭(失業)理論に関していわれたものではない。しかしわれわれの教訓としては、ケインズの長期失業理論(ことにJ・ロビンソン型においてしかり)とマルクスの産業予備軍の理論とはけつして無縁ではないということである。

- (24) (i) 長期失業理論に関するノート (I) —その源流について— 経済系、No.8. (1951.4)
(ii) バートンおよびリカアドウの「機械論」について (一) —(三)。経営と経済No.58—No.60 (昭26.9—昭27.9)
(iii) バートンの一生とその学説。経営と経済No.62 (昭28.9)
(iv) リカアドウ「機械論」成立の背景。経済系、No.21. (近刊)

あり、従つてその関係を明かにするためにもいま一度リカアドウ「機械論」への関心が必要となるのではあるまいか。

(一九五三、一一、二脱稿。一九五四、六、一六加筆)

- (25) この点に関しては小稿「長期的失業理論に関するノート (I)」のPP.33—36 および「バートンおよびリカアドウの『機械論』について (三)」P.49の(脚註150)を参照されたい。
- (26) J. Robinson: On re-reading Marx. Cambridge 1953. I. Would you believe it? p. 6.